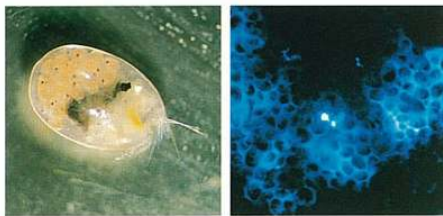
シーワールドのアニマル達

●ウミホタル

12月18日に開通した東京湾アクアラインの木更津人工島の愛称として一躍有名になったウミホタルは、全長3mmほどになる「ミジンコ」の仲間です。波の静かな内湾の砂泥底にすみ、館山湾は日本でも有数の生息地として知られています。光をはなつ生きものですが、昆虫の「ホタル」とは異なり、刺激を受けた時に発光物質を体外に出し、青白く光るのが特徴です。この発光は敵におそわれた時の「目くらまし」や繁殖行動の時の何らかのサインと言われていますが、その真の意味はいまだ謎につつまれています。多くの人々にウミホタルのことを知ってもらおうと、このウミホタルの展示を12月から開始しました。生活環境を再現した水槽では、波間を泳ぐ小さな姿を展示し、顕微鏡とモニターテレビを使った拡大展示コーナーでは、卵を抱いた個体が、アシを器用に使い卵をかきまぜる細かな動きを、生中継で観察できるように工夫されています。また、発光展示コーナーでは、刺激方法の開発により、自然に近い発光を見てもらうことができるようになっていたり、水槽内で繁殖した全長1mmほどの子どもを、親と比較しながら見られるコーナーも設けられています。顕微鏡をのぞかなければ見ることができなかったミクロな生物の展示は、今まではあまり行われていませんでしたが、今回のウミホタルの展示をきっかけに、これからも小さな命をもった生きものたちにスポットライトを当てていくつもりです。

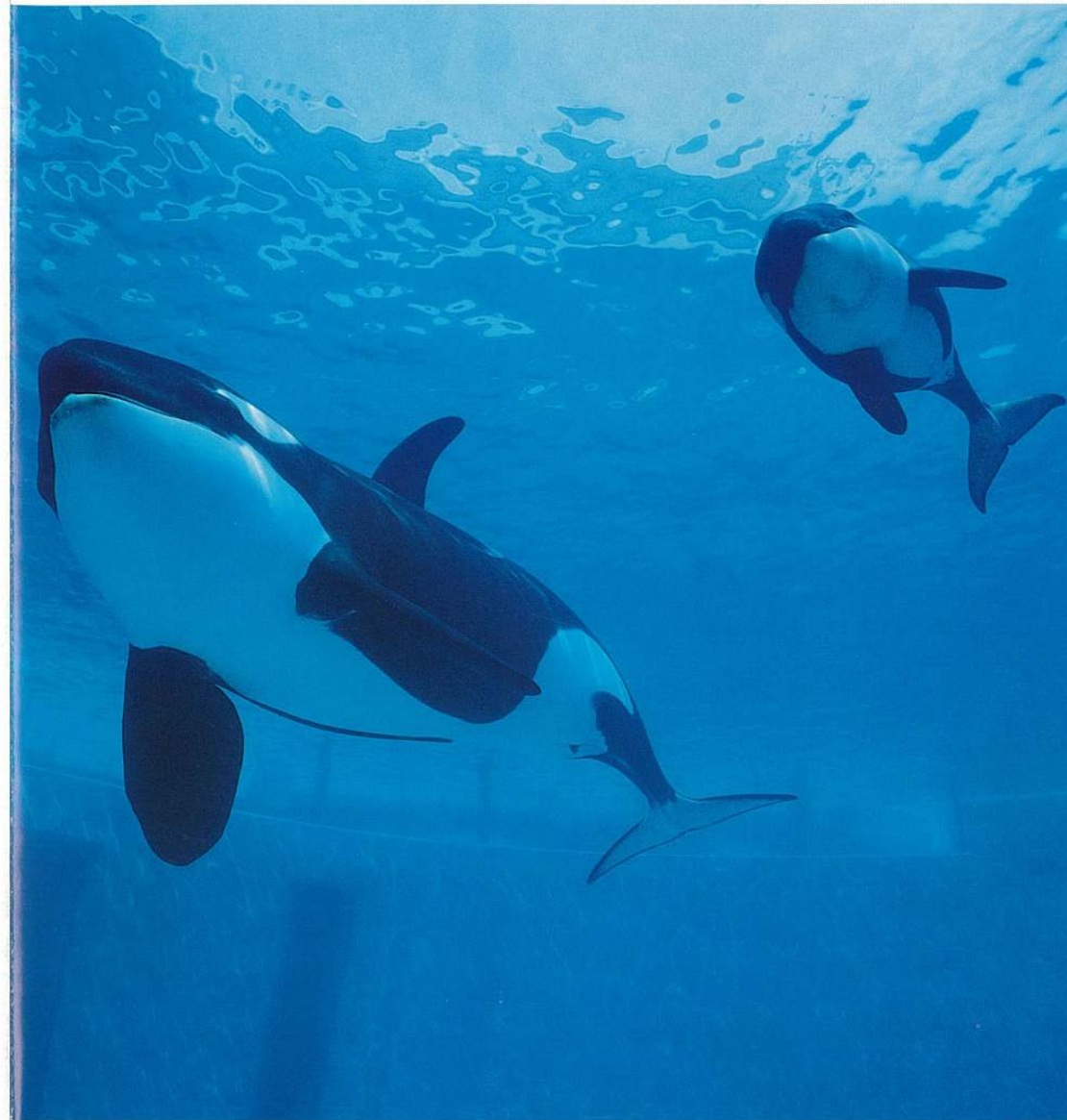
（中坪）

▲抱卵中のウミホタル *Vargula hilgendorfii* と発光

●モリアオガエル

モリアオガエルは、本州から九州にかけて広く分布していますが、その産卵場所が天然記念物に指定されていることもあって、その姿はなかなか見ることができません。水辺から離れた深い森の中の木の上で生活し、足の指先には「吸ばん」が発達しており、木の枝や葉にぴったりとくっつくことができます。春から夏にかけて森から出て、生まれ故郷の池に集まり、そのまわりの木の枝の上で産卵します。卵は綿菓子のような白い「あわ」のかたまりにおおわれていて、鴨川周辺でも、この時期になると「ちょうちん」のようにぶらさがった卵を見ることができます。この「あわ」は、中の卵を乾燥から守る役目をしていて、オタマジャクシは「あわ」の中で生まれます。数日後、「あわ」のかたまりはくずれて、中のオタマジャクシは次々と池に落ち、水中生活をはじめます。オタマジャクシは、1ヶ月ほどで幼生になり、陸上生活をはじめ、夏の終わりには、山の森の中へ移動していきます。当館では、このモリアオガエルを自然な姿でご覧いただくために、水槽の中に葉の大きな植物を入れ、紫外線ライトとファンを使って、暖かで快適な環境をつくっています。昼間は葉の上でじっとしていますが、夕方になるとオスは「コロコロ、コロコロ」とすんだ美しい声で鳴き、活発に動き出します。当初は餌付けのむずかしい動物でしたが、今では1年を通し展示できるようになりました。

（堀井健）

▲モリアオガエル *Rhacophorus arboreus* と展示水槽

さかまた No.51　（禁無断転載）

編集・発行　鴨川シーワールド

〒296-0041 千葉県鴨川市東町 1464－18

☎(0470) 92－2121

発行日　平成10年7月

さかまた

鴨川シーワールド　NO. 51

シャチの赤ちゃん誕生

ステラとトレーナーの長〜い1日

▲出産直前

1月11日早朝、「尾ビレが出てきたよ!!」の電話にとび起き、あせる心をおちつかせながら、シャチがいるオーシャンスタジアムへ向かいました。24時間体制で監視を続けていたステラの出産がはじまったのです。その時からステラとトレーナーたちの長い長い1日がはじまりました。

出産

メインプールをのぞきこむと、ゆっくり泳ぐステラの生殖孔から小さな尾ビレが出ているのがわかりました。そこで、ステラが安心して子どもを産めるように、同じプールにいるオスのオスカーを隣のプールに移動させることを試みましたが、オスカーはステラから離れることをきらってうまくいかず、結局オスカーをメインプールに残したままの出産となりました。

赤ちゃんの尾ビレが見えてからは、その後大きな変化がないまま時間だけがゆっくりと流れていきました。我が子の誕生を待つ父親の心境とは、このようなものなのでしょうか？

暗かった空が明るくなりはじめたころ、赤ちゃんの尾ビレが出たりひっこんだりするようになりました。そして、背ビレが生殖孔から出た瞬間、スルリと赤ちゃんは産みおとされました。午前8時ちょうどのできごとでした。

ところが、どうしたことでしょうか。生まれた赤ちゃんは尾ビレをあおらず、プールの底に沈んでいってしまったのです。当然水面に泳ぎ出て初呼吸をするものと思っていた私の心に一瞬不安がかすめました。その時、オスカーが赤ちゃんのそばに近づき頭の後ろを軽くくわえたのです。その直後、赤ちゃんは尾ビレをあおり、自力で水面へと向かい、生まれて初めての呼吸をしたのです。うぶ声をあげない赤ちゃんを、助産婦さんが背中をたたいて泣かせるように、オスカーがその役目をしたのでしょうか？今でも赤ちゃんの頭の後ろには、命の恩人となったオスカーのこの時の歯形が残っています。

母親「ステラ」

その後の赤ちゃんは、おぼつかないながらも呼吸をし、自分で泳ぎ続けてくれました。体長約200cm、体重約180kgの女の子の赤ちゃんでした。やれやれと一息つこうとした時、目の前ではとんでもない事が起こっていました。赤ちゃんの面倒を見なければならない母親のステラが赤ちゃんについて泳がず、オスカーと一緒に泳いでいるのです。母親のステラに赤ちゃんの世話をさせなければ、せっかく生まれた赤ちゃんはお乳を飲むことができません。そこで、赤ちゃんとステラを一緒に泳がせるために、いろいろなことを試みましたが、どれもうまくいかず、不安とあせりだけがつのる重苦しい時間が過ぎ、あたりはすっかり暗くなってしまいました。その時です。大きな決断がくだされました。トレーナーによって赤ちゃんをつかまえることが試みられたのです。ステラに母性愛が少しでもあれば、トレーナーにつかまった我が子を必ずとりもどしにくるはずだというのです。このような状況で水中に潜るのは不安でしたが、潜水器具の準備をしながら覚悟を決め、私ともう一人のトレーナーが水に入り、赤ちゃんをつかまえることを試みました。赤ちゃんとはいえシャチです。泳ぎに自信のある私でも、最初のうちは追いつくことができませんでした。ところが、時間がたつにつれ、赤ちゃんの泳ぐ力は弱くなっていくように感じます。このままでは助からないのではと思う気持ちをおさえ、再び赤ちゃんを追いかけはじめたところ、今度は簡単につかまり、かかえた赤ちゃんをステラの近くまで寄せていくことができました。しかし、それを見たステラはこちらに向かってきたものの、赤ちゃんを無視して遠ざかっていってしまったのです。やっぱりダメかなと思いながら、もう一度赤ちゃんをつかまえようと手をのばしてみると、赤ちゃんは目をまるまると開き私を見つめ、逃げようとしないのです。そこで、静かに赤ちゃんの胸ビレに手をかけたその瞬間、私の背後に衝撃が走り、私はそのまま渦巻きのような水流の中にまきこまれてしまいました。私は一瞬、何が起こったのかわからず、必死でプールからはい上りました。ステラが私の手から我が子をとりもどし、泳ぎ去ったのです。これは出産後11時間めのできごとでした。

▲ショー中、母親のステラと共に

授乳

このことをきっかけに、ステラは母性愛をはっきりして親子で泳ぎはじめました。ステラは赤ちゃんにあわせて、気をつかいながら泳ぎます。しばらくすると、赤ちゃんはステラのおなかの下に入りこみ、お乳をさぐりはじめました。赤ちゃんは口先を生殖孔のまわりにつけ、お乳の場所をさがし続けます。そんな状態がまる1日続きました。トレーナーたちは無事に授乳してくれることを祈りながら、観察窓から親子の状態を食い入るように見守り続けました。

しかし、お乳がでないのか、ステラは赤ちゃんにお乳をやろうとはしません。エサをもっと増やせばお乳がはり、赤ちゃんにお乳を飲ませるようになるかもしれないという考えから、エサをいつもの1.5倍あたえる指示がでました。この方法が効をそうしたのか、赤ちゃんは生まれてから54時間を経過した1月13日午後2時25分、親子で観察窓の前を横ぎった瞬間、左側のお乳に吸いついたのでした。「やった！吸った!!」トレーナーたちはおもわず興奮して歓声をあげてしまいました。

それからは、順調に授乳をしはじめ、吸い方も次第に上手になり、１回で乳首に吸いつき、口から乳汁があふれ出るほどゴクゴクと飲むようになりました。そのおかげで赤ちゃんは日に日に丸々と太り、泳ぎ方も力強くなって、生まれて２ヶ月めには、隣のプールにいた父親のビンゴとも対面し、親子３頭で泳ぐ姿も見られるようになりました。

▲授乳シーン

日本で初めて生まれたこのシャチの赤ちゃんは、その後全国の大勢の皆さんからの応募の中から愛称は「ラビー」に決まり、日毎にやんちゃになって元気にプールの中を泳ぎまわっています。私たちは、ステラ母さんのサポートをしながら、ラビーの成長を見守っていきたいと思います。

石川美

トピックス

私の大先輩 長寿の動物たち

鴨川シーワールドがオープンしたのは昭和45年10月。多くのお客様と動物たちに支えられて28年がたちました。ここでは、シーワールドの歴史を築いてきた動物たち、飼育係5年目の私よりもずっと先輩の動物たちをご紹介しましょう。

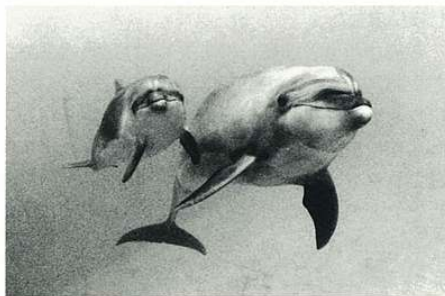
バンドウイルカ　「スリム」

鴨川に住所を移して早26年、スリムは現在、バンドウイルカの国内最長飼育記録更新中です。以前はイルカショーのスターとして大活躍していましたが、今では繁殖用プールの中で子育てにはげんでいます。スリムの眼を見ていると「新米のあなたが考えていることはすべてお見通し」とでも言っているような気がします。

▲スリムと子どものカリス

フンボルトペンギン　「ペケ」

「そんなラブちゃんもはじめは結構、緊張していたのよ」と語るのは、アシカショーの名脇役、フンボルトペンギンのペケ。とぼけたキャラクターとワンテンポずれた演技で、ペンギンチームの人気を高めてくれました。シーワールド生まれの筋金入り、ボケ役に徹して26年、ペンギンチームのリーダーは健在です。

▲リーダー・ペケひきいるペンギンチーム

キタゾウアザラシ　「ラブ」

「日本一？私なんて世界記録更新中よ」と言っているのはキタゾウアザラシのラブ。アメリカから移住してきて、13年9ヶ月。アシカショーをご覧になった方は覚えがあるはずです。そう、ショーもクライマックスにさしかかるころ、突如として登場する体重800kgの巨体。今年完成するロッキーワールドの新居でも、その堂々とした寝姿を見せてくれることでしょう。

▲アシカショーのクライマックス、ラブ登場!!

ゼニガタアザラシ　「トッピ」

21年もの間、隣のアザラシプールから、笑いと拍手にわくアシカショーをながめているのは、ゼニガタアザラシのトッピ。シーワールドで生まれた2頭目のアザラシで、その名前も一般公募によりつけていただきました。以前はアシカショーの幕あいで、独特のパフォーマンスも披露してくれました。今は「大ボス」としてアザラシファミリーをまとめます。

▲アザラシプールの「大ボス」・トッピ

カマイルカ「アロー」・「サム」

現役バリバリの大スターは、イルカショーの「顔」、カマイルカのアローとサム。コンビを組んで実に15年。息のあったコンビネーションとスピーディーなパフォーマンス。今日もフルパワーで活躍中。

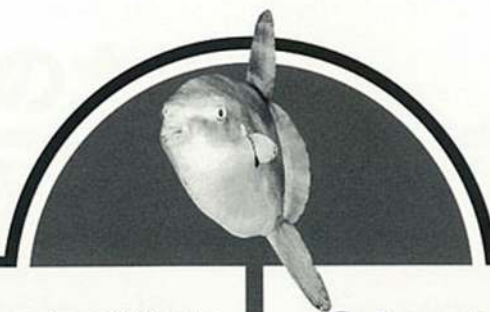
▲息のあったコンビネーション・アロー（手前）とサム（奥）

▲ノサの得意技・ボールバランス

トド　「ノサ」

昨年、鴨川シーワールドで初めて、トドの赤ちゃんが生まれました。お父さんの名はノサ。シーワールドにやってきた時はまだ小さかったノサも、18年の時が過ぎ、立派な父親になりました。トドショーで披露するその低音も、ますますみがきがかかり、やがて子どものレイとのハーモニーをつくり、お客様にとどくことでしょう。

以上、動物たちとの付き合いにおいては、まだまだ経験も少なく役者不足の私ではありましたが、私の大先輩のほんの一部をご紹介させてもらいました。動物たちと手をとりあって、これからもシーワールドの歴史を積み重ねていきたいと思います。

阪田

●トドとセイウチの赤ちゃん愛称決定

昨年あいついで誕生した、トドとセイウチの赤ちゃんの愛称を募集したところ、全国から3万通をこえる応募がありました。これらの中から、メスのトドの赤ちゃんは、母親の「ルイ」の一字をとり、「明るくのびのびと育って欲しい」との願いをこめて、「レイ（Ray)」と名付けられました。また、オスのセイウチの赤ちゃんは、日本で初めて当館で誕生した兄の「チャッキー」の「キ」を頭文字に入れて、「元気はつらつとした男の子に成長して欲しい」との願いをこめ「キック（Kick)」と決まりました。すばらしい名前をつけてもらった２頭の成長が大変楽しみです。

佐　伯

●シャチの巨大菊人形出現!!

11月１日、正面入口広場に長さ12m、高さ3.6mのシャチの菊人形がおめみえしました。今年で10回めとなる菊花展の目玉として製作されたものです。骨組み作製からはじまり、苗の植えつけ、小枝を網にはわせる「誘引作業」など、準備には9ヶ月を要しました。その間、菊が病気にならないように常に気を配ったおかげで、オープンの時には7分咲きとなり、造園スタッフ一同、ホッとひと安心しました。今年はこのシャチ人形の内側に入ってその仕組も見学できるように工夫したので、外だけでなく内側でも記念撮影をするお客様の姿が見られました。病気もせず、見事な花を咲かせてくれた菊たちに感謝しています。

鈴木孝

●第10回研究集会講演会

今年で10回めを迎えた国際海洋生物研究所年次研究集会が1月31日と2月1日の両日にわたり千葉県立長狭高等学校文化ホールで行われました。「海獣類研究の現状と課題」をテーマに、研究者と水族館技術者による海外6演題を含む13演題の研究発表が行われ、第10回を記念するにふさわしい内容となりました。また、2月1日の午後には一般市民のための講演会が、国営沖縄記念公園水族館の内田詮三館長をお招きし、「南海の巨鯨と巨魚－ザトウクジラとジンベエザメ」のテーマで開催されました。多数の貴重なスライドを使ったザトウクジラやジンベエザメなどの壮大な海の生きものたちのお話は、参加した多くの市民の皆様を魅了しました。

桐　畑

●長野オリンッピク開催記念「ペンギンと遊ぼう・鹿島槍」

2月5日～11日の間、鴨川市観光協会と姉妹提携を結んでいる長野県大町市のサンアルピナ鹿島槍スキー場で行われた、冬季オリンピック開催記念イベントに、当館のオウサマペンギンとジェンツーペンギンが参加しました。ゲレンデでのペンギンパレードやペンギンとの記念撮影、ペンギンタッチ、給餌体験など、もりだくさんの内容に、海外からのお客様も多数おとずれ、まるでオリンピック会場のようなにぎわいを見せました。ほとんどのお客様がペンギンを近くで見るのは初めてのようで、「ぬいぐるみじゃないよ！本物だよ本物！」といった声も聞かれました。活躍してくれたペンギンたちは金メダルでした。

中野良